

家ぞくみんなのやさしさ

寺園 芽生てらぞの めい

涙がポロポロポロリン。

もうすぐ一年生がおわろうとしていた二月末、とてもかなししいことをお母さんからつたえられました。いつものように学校から帰って「おやつ、何かなあ。」とすわっていると、「実はね、お父さん、東京へてんきんになったの。」

と、とても言いにくそうにしているお母さん。わたしはおかしのことなんかどうでもよくなり、ただかなしくて、大つぶの涙をずつとながしていました。ふしぎなことに

「ワーン。」

と、泣く声も出ませんでした。

よく日、七才のわたしは、楽しくて大好きな学校をたった一年でてん校するなんて考えられない、そして、友だちがたくさん出来たのにわかれたくないという気もちが何よりも強いこと、また、大好きなお父さんと一しょにいたいし、今までみたいに色いろな話をしながらどう校したいというすなおな気もちをつたえました。大声で泣いてもタダをこねてもりょう方を手に入れることが出来ないということはわかっていました。お父さんもお母さんも何も言わず、しんげんにわたしの話

を聞いてくれました。

四月、お父さんは一人で東京生かつをはじめました。とても心細かったと思います。だって東京に一どもすんだことがないし、りょう理も全く出来ないのですから。お母さんはそんなお父さんのためにおべん当を作り、よくたつきゅうびんでおくっています。たつきゅうびんがとどくと

「たくさん作ってくれてありがとう。ばんごはんが楽しみだな。」

と、電話をかけてきます。一人で食べるのに楽しみだなんて言うのは変だな。でも、それはお父さんのやさしさであることは、家ぞくみんな、知っています。このようにとてもやさしくて、一生けんめいがんばるお父さんのことが大好きです。

わたしはこんどお父さんが家に帰ってきたら、よろこんでもらえることをたくさんしてあげようときめています。まず、一しょにお風呂に入ってせなかをながしてあげよう。そしてお風呂上がりのビールをついであげよう。パンダのようにたれ目でにこにこしているお父さんの顔が目にかびます。

早く帰ってこないかなあ。